

地域社会と宗教との関わりについて

—名古屋市北部楠地区を例に—

Relation of Local community and Religion

- Kusunoki district ,The northern part Nagoya city ,as a case study-

大崎 洋 Hiroshi OSAKI

概 要

最近、「地方の寺院消滅」とか「25 年後に 35%の宗教法人は消える」(注1)といわれるが、本来宗教は人間を向上させ、人間を幸福にしていこうためにある。これからの地域社会と宗教との関わりについて、名古屋市北部楠地区の事例からまとめたものである。

キーワード

ソーシャル・キャピタル Social Capital

相互信頼社会

宗教的寛容

新しき村

ジョン・デューイ

目 次

- 1 はじめに
- 2 楠地区の事例
- 3 地域社会と宗教の関わり
- 4 寛容な宗教間対話
- 5 おわりに

1 はじめに

地域社会には古くからの宗教施設（神社や寺院）が存在している。そこには、民生委員を経験した住職や保護司として活動中の人柄のいい住職とその家族が居住し、宗教施設と宗教者に対しては、そこに住む地域の人々は畏敬の念をもって接している。わが国では地域や共同体の中心に神社や寺院の役割があった。

今でこそ役割は狭まっているが、かつての宗教施設は、人々の信仰の場、コミュニティの中心地、文化・芸能の発信地、子どもの遊びの場、弱者の避難場所など、社会に対して広い役割を担っていた。

筆者は名古屋市北部の楠地区において自治会長を

務めているが、宗教施設や宗教者は、かつてのような地域社会のチカラになっていないのではないかとこの問題認識から、コミュニティの中心のひとつという観点から、この地区における宗教との関わりについて考察する。

2 楠地区の事例

2.1 楠地区の概要

楠地区は名古屋市北区の北部に位置し、春日井市の隣接地域であり、5学区（楠・味鋤・西味鋤・如意・楠西）で構成されている。畑・水田が散在する住宅地であり、マンション、市営住宅が広がってい

る。かつては農業中心の地域であり、いわば名古屋の外縁である。古墳群が散在し、地盤が比較的硬く、大災害の被害予想は少である。人口は平成28年10月1日現在で、5学区合わせて、44,134人（北区の27%） 高齢化率23.9%（平成12年15.8%、名古屋市の平均21.2%）（注2）、であり、未だに地域活動の中心者は、富裕層のJA関係者や神社関係者が占めている。

名古屋人は一般に保守的・排他的といわれるが、楠地区はその傾向が強く、住民を「地の人」「ヨソ者」と言い分け、モノやサービスの価格に極めて敏感でこの地域では「お値打ち」（価格の割には得なこと）が重要な価値基準になっている。最近ではサツマイモの栽培が中心で名古屋のご当地スイーツ原料として有名である。

2.2 楠地区の宗教を取り巻く状況

「地縁」や「血縁」が色濃く残っており、檀家や地域の人が神社や寺院を支えているが、将来について、神社関係者の危機感強いが、寺院関係者の「寺院消滅」といわれるような危機感あまり感じられない。

また、地域内宗教関係者の社会活動、社会教育活

動、社会奉仕活動等は十分でない。

(1) 神社

各神社ともJAとの連携が強く、運営は地域で主要役職を務める氏子総代会の手によりなされている。初詣の参拝者は、例年大きな変化がない。以前は10月の大祭で、子ども会による御神輿等活況を呈していたが、子ども会は4年前に消滅または解散し、各自治会主催で秋祭りの開催時に、有志が子どもと共に参りをするという状況で、辛うじて伝統を残している程度である。

熱田神宮・愛知県護国神社の初穂料は連合自治会が取りまとめ寄付をしている。

2004年4月12日の佐賀地裁判決^(注3)にみられるような信教・信仰の自由を侵害するといった、自治会が取りまとめた神社関係の支払いはおかしいというような意見は、現在のところ顕在化していない。

しかし、若い人達のなかでは、以前の伊勢神宮崇敬会ホームページに見られたような神宮大麻を「天皇と国民のきずな」「国民のあかし」と考える人達は減ってきており、筆者の自治会（120世帯）においても若い世代の神札購入の減少、「味鋤神社神札」を

表1 楠地区神社の状況

学区	神社	氏子数	祭神	建立	特徴
如意	神明社	33戸	天照大神	享革2（1717）年	
楠	大井神社	196戸	網像女命 （ウズアメノミコト） 速秋津彦命 （ハヤアキツヒコノミコト） 速秋津姫命 （ハヤアキツヒメノミコト）	延喜式神名帳（927）に記載、由緒ある神社	如意的獅子芝居（名古屋市指定無形文化財）は安政年間に始まる
楠西	大我麻神社	52戸	天照大神	文政（1818～1830）年間	
味鋤	味鋤神社	680戸	物部氏の祖先と伝えられる 宇麻志麻治命 （ウマシマジノミコト）	平安時代初期の宮中行事や制度などを記した延喜式神名帳（927）に記載、格式の高い神社	寛治7（1093）年、競馬の神事が始まり昭和11（1936）年まで流鏑馬が行われ、多くの見物人でにぎわった。
味鋤	西八龍社	300人	高龍神	承平（931～938）年間と伝えられる	毎年7月28日に大祭「雷徐祭」
味鋤	東八龍社	味鋤神社と同じ	高龍神	平（931～938）年間と伝えられる	

購入する世帯は6年前に 26 世帯あったが、本年は 12 世帯と半減している。また、高齢化のため、地域内で施設を維持管理するだけの崇敬者を集めることが難しくなっている。

神社の祭礼は、伝統的な地域の民俗的行事として有形、無形の文化財の保護・存続の活動でもある。長い歴史の中で、町内会・自治会とも深いつながりがあり、それを全く断ち切るというのは問題があり、まさに、今後の地域内の神社神道のあり方が問われている。

真言宗智山派護国院は、地区最大の有名な寺院である。

曹洞宗松徳院は昭和 26 年～平成 11 年まで、半世紀にわたり、境内に隣接した幼稚園を運営していたが、閉鎖後、立派な施設がありながら、住民の近寄りやすい特別の意識があり、閑散とした状況であっ

た。もともと、住職の地域に関わり、地域に貢献したいという思いが強かったので、筆者の働きかけにより 4 年前、防犯委員になり法務と併行して地域活動に取り組むようになってから以下の活動をしている。

- ① 各自治会総会、役員・組長会の会場（本堂・和室・応接室）の提供
- ② 自治会全体で年間 3,000 円という破格の料金での駐車場貸し（必要な時に自治会員に貸し）
- ③ 地域イベントの開催
 - ・車両ナンバープレート盗難防止ネジの推進キャンペーン
 - ・自治会暑気払いの開催
 - ・防災訓練の実施
- ④ 老人会の健康体操等の会場提供
- ⑤ 各種用具の貸し出し

(2) 寺院

表 2 楠地区寺院の状況

学区	宗派	寺院	建立・寺宝	檀信徒数 (戸)	住職の地域 活動(現在)	隣接地	本堂の活用	後継者 (予定含)
如意	臨済宗妙心寺派	瑞應寺	貞和 4 (1348) 年 釈迦誕生及び涅槃 図など 20 数点	2 1 5				あり
	真言宗智山派	鶏足寺	永享 9 (1437) 年 護国院の末寺			大井神社	老人会集会所	護国院 住職子息
	曹洞宗	岳桂院	文禄年間 (1592~1596) 大般若経ほか数点	1 6 0				あり
味鉢	真言宗智山派	護国院	天平年間(729~749) 本尊は行基作薬師 如来 岩屋堂古墳より出 土した準国宝の古 鏡・鉄鉾や石棺 国重要文化財の「千 手観音二八部衆像」	3 0 0 余	保護司 真言宗智山 派本山役職	味鉢神社	年数回本堂で 有料コンサー ト	あり
	曹洞宗	松徳院	慶安 2 (1649) 年 寺宝は太平洋戦争 時空襲により消滅	約 5 0	保護司 防 犯 委 員 , 青パト提供	明 叟 幼 稚 園 (1951~2000)	民生主催の老 人健康体操等 自治会各会合	あり
楠西	妙見堂	日蓮宗	明治 44 (1911) 年	住職不在 近所の 2 4 軒で管理			かつて夫人達 が講を作り、 女性交流の場	

⑥ 保護司としての活動

⑦ 私有車を青色防犯パトロール車として提供

地区内で最も開かれた寺院であり、これからの地域社会と宗教の関わりを提示する先進的な寺院といえる。

楠西学区の妙見堂はかつて夫人達が講を作り、昭和30年代初頭まで存在したが、その講も現在ではない。

通常、講は二つに分けられる。一つが経済的な目的をもって形成される頼母子講・無尽講であり、もう一つが神社と結びついていた神道的な講、住職を中心とした宗教信仰上の講である。

筆者の自治会において防災訓練を計画しても、参加者は世帯半数を超える程度であり、地域の結びつきが薄れてきている今こそ、何らかの講の復活を検討してもよい時期にきていると思われる。

また、社会構造的な変化によって、家族や地域社会に基盤をおく既成宗教は存続する条件が厳しくなっている。正式な葬儀・法要を営まない（営めない）直葬を行う人が増えてきたこと、墓の維持管理が根本的に無理な世代が登場してきたことで、寺院仏教では葬儀・法要をますます手放さなければならぬ状況が出てくると思われる。

住職の高齢化と後継者不在、檀家の高齢化、布施の「見える化」、葬儀・埋葬の簡素化など、社会構造の変化に伴う問題が次々に浮上、全国では空き寺が急増し、寺院の整理・統合の時代を迎えようとしているが、この地区内の住職のヒアリングからは、危機感は浮かんでこない。

(3) 民間信仰

江戸時代は、現在からみると想像以上に民衆の社寺に対する宗教の念が厚く、身近な信仰の対象として石仏を刻み、路傍や墓地などに祀ることが多く、その石仏が残存している。

① 首切り（一ノ曾身がわり）地藏（味鋤）

文政(1818~1830)の銘がある高さ約90cmの石像、摩滅が甚だしく、胴体がやや斜めに2つに分かれている。昔、郷士・一ノ曾五左衛門がお手伝いの女性を切ったところ、この地藏が身代わりで切られ二つになったという伝説である。例年8月23日が例祭日で近隣の参拝者でにぎわう。

② 岳桂院の六地藏（如意）

③ 護国院墓地の六地藏（味鋤）

山門西側の無縁塔の頂上に、六地藏が背中合わせ

に安置されている。南面の一体には「元禄一三庚辰九月吉祥日」、もう一体には「施主岡田成房」との刻銘がある。

④ 庄内川沿い三地藏（味鋤）

現在3ヶ所ある。御幸橋の堤防上・水分橋北端の東側・味鋤神社参道を南進した庄内川堤防上やや西方、これを祀った年代は不詳、度々庄内堤が決壊したため、水禍を守護するため祀った。

(4) 新宗教

新宗教の施設としては、楠地区を中心拠点とする創価学会北文化会館(西味鋤)のみである。

仏教教団の信者の多くは寺院の檀家として形式的に信者になっているだけで、宗教活動に積極的には関わっていない。ところが、創価学会員の多くは組織に強い一体感をもち、日常の活動に熱心に取り組んでいる。かつての創価学会は、現在とは比べられないほど「折伏」という攻撃的な姿勢を示していた。

ところが、現在の創価学会に対する嫌悪感は、昔に比べれば、かなり弱くなっているように思われる。創価学会の会員は、地域に溶け込もうとして、他の人たちが嫌がる自治会やPTAの役員など地域活動を積極的に引き受け、神社との密接な繋がりのあるお祭りにも参加している。しかも、地域のために活動するかわりに布教活動をするという事はあまりしない。さらに、災害時には積極的に避難施設として提供されている。だから地域の人たちも、かつての創価学会アレルギーは以前より薄れ、創価学会の会員たちはいい人達だと認識するようになってきている。

公明党との関係も形の上では全くの別組織であり、公明党の支持母体が創価学会というだけであるが、両者が実態としては密接不可分であることは、周知の事実であり、選挙ともなれば学会員は公明党の票獲得のために奔走する。公明党が自民党と連立政権を組んでいることにより、創価学会はそれを通して、日本社会に安定した地位を築いたといえる。

日蓮正宗から独立した創価学会の信仰は、合理性を特徴とし、宗教ならではの教義はあまり浮かんでこない。過激な折伏をやめ、常識的に行動し、本尊も変更して、宗教色を薄めながら、みんなで肯定しあうコミュニティを形成していくような活動に映る。



写真1 味鋤神社(右)と護国院(左)

3 地域社会と宗教の関わり考察

資本主義の進展の中で伝統的な社会システムは解体され、個人が共同体とは無縁な生活を送る状況が生まれてきている^(注4)。多様な習慣や関心をもつ人々が、地域社会という民主的共同体のなかで共存するための方途について、宗教との関わりをソーシャル・キャピタル^(注5)の視点から、さらに宗教者（住職）のあり方から考察する。

3.1 ソーシャル・キャピタル（social capital）の視点から

地域活動とソーシャル・キャピタルの両者の間に何らかの関係があることは想像に難くない。そこに住む人々の間で豊かなソーシャル・キャピタルが育まれている地域においては、当然様々な地域活動は活発であろうし、地域活動が低調なところではソーシャル・キャピタルもあまり豊かとはいえないだろう。地域活動は、地域において、互酬性や相互の信頼を高め、ネットワークを強化することを通じて、ソーシャル・キャピタルの形成を促進すると考えられている。他方、豊かなソーシャル・キャピタルは地域住民の多様な活動を活性化させる環境を提供すると考えられる^(注6)。

近年、とりわけ都市部において人口の流動性が高まるなかで、自治会・町内会の組織率が低下するなど、地縁組織型の活動によって地域社会のソーシャル・キャピタルを維持・形成する力は弱まっているといわれている。結束型も含む豊かなソーシャル・キャピタルを形成するためには、地域社会のなかで地縁型の活動を活性化することが重要となってくる。

また、自治会・町内会のような地縁的な組織は内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していく結束型のソーシャル・キャピタルを生みだしやすい。稲葉陽二は、ソーシャル・キャピタルの「ダークサイド」の1つとして「しがらみ」を挙げ、特に「結束型」のソーシャル・キャピタルと「しがらみ」は「表裏一体の場合が多い」と指摘している[稲葉 2011]。^(注7)

特に、地域社会におけるボスを取り巻く「しがらみ」は存在するが、可能な範囲で信頼、互惠性を拡大するような意識改革や既存の資源を利用するという意味で、味鋤の松徳院のような開かれた宗教施設の活用を推進していけば、古くからの「しがらみ」は少しずつ解消していくものと思われる。その推進役が自治会長といえる。

また、ソーシャル・キャピタルは地域文化や歴史によって醸成されたものである以上、短期日の人為的な営みによって信頼関係やネットワークが構築できるものではない。その意味では行政的な働きかけよりも既存の社会関係や社会集団を活用するやり方のほうがはるかに効果的である。歴史と文化、政治的背景から宗教が社会形成の前面に出てくることを拒む日本でも、宗教者や宗教団体の活動のあり方次第で、一般市民との間に信用と信頼を獲得し、教団が市民社会と協働することも可能である^(注8)。

日本仏教の特徴である寺檀制度が地域密着型であるがゆえに、それをソーシャル・キャピタルと捉え直すのはそれほど的是はずれなことではない。2000年から毎年実施されている日本版社会総合調査（Japan General Social Survey）の累積データや1981年から5年ごとに実施されている世界価値観調査から、宗教人口が相対的に少ない日本では、宗教心のある人、教団に所属している人のほうが、日本人一般よりも有意にボランティア・市民活動に参加することがわかる。創価学会の信者の人は他の宗教の人や一般市民よりも政治活動に熱心であることが裏づけられるが、創価学会の信者を除いた伝統仏教でも檀家となっている家は非檀家よりも社会活動への参加が活発であるといわれる。推測されることは、日本の地方都市や村落、及び都市でも、古いエリアでは檀家や氏子の組織、町内会と地方政治の地盤、地域産業の団体組織が重層的に重なっている可能性が高く、そのために地域の祭礼や旦那寺の行事に熱心に取り組むのではないかということである^(注9)。

信仰というものは個人のもの、その個人がさまざまな形で存在する宗教のなかから、自分にとって好ましいものを選び、それを信仰することになる。帝京大学の濱田陽は『社会貢献する宗教』の中で相互信頼社会を形成するために、次の3要件を挙げている。

① 非暴力性

宗教性の行動が一般社会や他者を害さないこと。（自分の力を越えた尊い何かについての強い感情、ときには信仰、を希望されていないところに押しつけられないことを含む）

②行動の自由

一般社会や他者を害さず、当事者を幸福にする宗教性の行動について、その行為遂行の自由を、一般社会や他者が認めること。

③正統な評価

宗教性の行動が一般社会や他者を益する場合、一般社会や他者が正しい評価を与えること。

この3要件が満たされたとき、持続可能な地域社会の構築が可能であると述べている^(注10)。

あくまでも地域活動は、地域に住む人がこの地域に住んでよかったと実感することが肝要であり、それには、寛容の精神で心を開いて互いを知り、理解しあうことが重要である。

3.2 宗教者（住職）のあり方

地域住民が寺院に求めるものは、旧慣どおりの葬儀・法要だけではなく、現代家族の変容に合わせた形態（合葬墓や樹木葬などの新葬法）へのニーズもあるといわれている。現代の市民に、死生観の問題を扱う仏教への関心は高い。だからこそ仏教書は広く読まれている。仏教への潜在的ニーズをどう拾い上げていくのが、僧侶の手腕として問われていくのではないだろうか^(注11)。

また、住職に求められる資質は変わってきた。大きな変革期にあるお寺を力強く引っ張っていくことのできるリーダーとしての器、高いコミュニケーション能力、時代を読むセンス、そして何より、宗教者としての信仰心が求められている^(注12)。

本来、日本人は、お寺というものに、自然と畏敬の念をもつて接しており、したがって地域のお寺の本堂に集うことそのものに意義があるのではないだろうか。住職は「人の道」を説く人であり、多様な価値観・生き方を示す知の「引き出し」の多い人といえる。若い人の多くは SNS を利用し、本当の自

分をさらけ出すが、心から悩みを聞いてくれる人を求めている。また、高齢者は1対1で悩みを聞いてくれる人を求めている。これに応えることのできる人が住職である。心に染みる住職の言葉は大切である。

最近では、家族葬や散骨、永代供養などにみられるように、寺との関わりが希薄になっている。

よく言われる仏教寺院が直面する危機は、仏教界の努力不足が原因ではない。都市化、少子高齢化という日本社会の構造変化から生じている。寺院を過去からの遺産とするのではなく、積極的に地域住民を呼び込み、現代に活かす努力が必要となってくる。松徳院住職のように、仏教の理念や理屈を並べたてることだけでなく、今の生活を大事にしながら、人々に徹底的に寄り添い、その願いに応えようと努力することである。「僧侶が地域の人々に寄り添えるか」という地道な活動こそ、地域のソーシャル・キャピタルを維持・形成していくと思われる。

4 寛容な宗教間対話

諸宗教の相互理解を深め、異なる諸宗教の人々との共存を目的とする点では、宗教間対話は他宗教への寛容というテーマと共通する。かつての温かくて緊密な人間関係の共同体が維持された底流には、宗教的信仰があったことも事実である。日本人はよく無宗教と言われるが、もともと無宗教だったわけではない。社会が変化するなかで、無宗教という意識を強くもつ方向へと変化を遂げてきた。また、日本人は宗教心が薄いとも言われるが、宗教心が薄いのではなく、宗教に対する理解が薄いと言える。皆が似たような価値観、生活スタイルを持つ島国の中で暮らす日本人が、宗教に関する価値観の違いに気がつく機会はとても少ないといえる。寛容な宗教間対話について、武者小路実篤の「新しき村」、ジョン・デューイの『人類共通の信仰』から考察する。

4.1 宗教としての「新しき村」^(注13)

大正9(1918)年、自他共生の理想郷をめざして武者小路実篤(1885~1976)とその同士により始められた農業協同集落「新しき村」は、古びているとはいえ、異なる他者を尊重し、他者から学び、そして互いに助け合おうという精神が息づく共同体である。特に、多様な価値観や文化が、急速な勢いで出会う今日の社会において、寛容な宗教間対話を考察する

上で大変参考になるものである。

「宗教」とは、神または何らかのすぐれて尊く神聖なものに関する信仰であり、その教えやそれに基づく行いとし、「信仰」を神・仏など、ある神聖なものを（またはあるものを絶対視して）信じ尊ぶこと。そのかたく信ずるころ（註14）であるならば、新しき村の信仰は人類の真心を通して顕れる力を信仰することであり、まさに宗教である。

真心の力を強めるには、心をすなおにしなければならぬ。この真心を信じるもののみ、新しき村の信仰をもつことができる（註15）としている。さらに、「我々は僧侶とは違うが、一種の僧侶をもって任じていい。新しい生活の僧侶である。人間が人間らしく生きられる本当の道を発見しようとする僧侶だ」（『第二の対話』）という実篤は、「新しき村」の広報活動を「伝道」（『第三の対話』）とさえ表現する。ここにおいて「新しき村」の活動が広義の宗教活動であることは明らかであるといえよう。

「新しき村」の思想について、実篤は「彼等は資本主義では勿論ないが、社会主義者でもない。彼達は第三のものである。人間主義者である。世界同胞主義者である。」とする。人間主義、すなわち人間の真心と信仰が貴重となる、というのである。そして、皆と協力して、人間の国をつくりあげ、すべての人間が天命を全うし、個性を十分に発揮し、皆が正直に生き甲斐を感じ喜んで生きられる世界を目指した。すなわち人間の真心と信仰が基調となる、というのである。彼自身が認め、述べているように、「新しき村」の運動は宗教的な性格を多くもった運動であった（註16）。

このような彼らの行動は一見、時と社会には無縁な一人よがりのようにさえ思われる。しかしそれは逆に、現社会への喚起としての理想国としてであったようにも思われる。

個性を尊重し、かつ、他人の自我を害さない。共同生活の中、村の生活に必要な仕事を分担し、互いが兄弟姉妹のように協力しあい、非暴力で平和主義、知恵や新しい技術を生かし、人として成長し、すべての人が人間らしく生きる社会をつくることを理想とした。日向の村（宮崎県）は大正7年から現在まで延べ250人が生活していたが、現在は2家族3人が生活している。一方、かつては幼稚園も保有し、最大35人いた東の村（埼玉県）は2年後（2018年）に創立100年を迎えるが現在は、3家族11人が生活している。

実篤の著作には、『二十八歳の耶蘇と悪魔（後に二十八歳の耶蘇と改題）』その後が続く『三十歳までの耶蘇』、『釈迦』、『孔子』、『空海』、『日蓮』などがあり、実篤の文学における「神」とはキリストを賛美し、釈迦を尊敬し、孔子に感心し、ソクラテスにも心惹かれるその中の誰かに自己を限定しない。宗派に対しても同様で、実篤の核心には、常に限定への警戒があった。自己限定を避ける実篤は、当然のことながら対立観念を排斥する。「あれかこれか」という二者選一的な考え方は全然なく、「あれもよしこれもよし」という考えが中心になっている。人間の自力を超えた「自然への意志」への随順という宗教性を帯びるわけである。換言すれば「無心」という境地である。「無心」は最上智よりも神に近いものではないか。」実篤が神という言葉で考えているところのものは、こういう形で表現される（註17）。

実篤のどのような宗教も受け入れる寛容な心は、宗教間対話をすすめていく上で参考にすべきものといえる。



写真2 東の村(埼玉県)の「新しき村」入り口

4.2 ジョン・デューイの宗教論から

夫人のアリス・チャップマンは深い宗教的気質をもっていたが、ある特定の宗教や特定の教会の教えは、決して受け入れなかった。この彼女の態度から、デューイ(1859~1952)は、宗教的態度というものは、人間の経験に自然に備わるものであって神学者や教会制度は、それを促進するよりも、むしろ麻痺させるものである、という信念を得た。この信念は後にデューイが『人類共通の信仰』(A common Faith, 1934)という彼の著書で、人間の心のなかにある「宗教的なもの」は否定することができず、尊重しなければならないが、既成の宗教は有害であり、

無用であるという思想を展開したときの理論的基礎になった（注18）。

デューイは「宗教（a religion）」と「宗教的なもの（the religious）」を区別する。前者は特定の信仰と実践を伴った団体、あるいは制度化された組織を意味する。これに対して後者は、いかなる制度や組織的体系も意味せず、あらゆる目的や理想に向かってとりうる人間の態度をさしている。デューイは、制度としての宗教から、理想にむかう態度としての「宗教的なもの」を解放することが必要だ、と主張するのである（注19）。

デューイは一つの新しい「宗教」（a religion）を提案しているのではなく、新しい「信仰」（a faith）を提案しているのである。人間経験に内在する宗教的性質（理想追求の態度）そのものを古い宗教組織や制度から解放し、発展させることによって、社会をよりすばらしい民主主義社会に変革できるとする信仰を提案しているのである（注20）。デューイの宗教論は、前述の『人類共通の信仰』にみることができる。この宗教論において、聖書の「主を知る」とか「神を知る」ということが、つまり「超自然的な実在者」を知るということが、宗教の根本的要因ではないと批判していることである。デューイが問題にしたのは、既成の歴史的諸宗教が積み上げてきた夾雑物を取り去り、全く新たな立場から、人間の経験にとって根本的に宗教的なものとは何かと問うことであった（注21）。

デューイにとっての問題は、既成宗教の信条によって窒息させられている「宗教的」なものを解放することであった。それは「罪、回心、贖罪、洗礼、受肉」などの教義についての吟味ではなく、「実在は成長の過程」であり、「流転変化する自然界そのもの」であるという立場から「宗教」を見直すことであった。また、宗教のもっと全体的な「知的な習慣、方法、規範」を問い直すこともあった。この問い直しにおいてデューイは「宗教的経験」とは、人間と環境との相互作用によって成り立つ「経験」が両者の関係を調整することで、「生活と生活の条件」によりよく順応するよう機能することを意味している。つまり、経験が新しい生活の条件により良く順応して、生活に安定と平衡を生みだすとき、その経験を「宗教的」というのであるとした。

「宗教的」なものの究極的な意味は、それと共同するならば、生活に変容を生じさせることのできる諸力との一体性を自覚することである。そして「宗教

的」とは、この世界の中で解決のつかない問題に突き当たるとき、合理的検証できる領域を超えなければならないとし、それが宗教の問題とした。

地域に住む、すべての人が地域内の神社・寺院と関係をもって宗教生活を送る訳でないが、寛容な宗教間対話を進めていくには、特定の宗教を信じる者、無宗教の者、宗教者のそれぞれが、デューイのいう根本となる宗教的なものをそれぞれが理解し、異なる他者を尊重し、他者から学び、そして互いに助け合おうという精神をもつことが基本となるのではないだろうか。

宗教にとって大事なことは、現実のなかで、地域のためにどう貢献できるかということであり、宗教者と地縁共同体である自治会との関わりはますます大きくなるに違いない。

5 おわりに

社会資源としての宗教のあり方、役割を問う意味では、京都大学の広井良典が説くように[広井2009](注22)社寺をコミュニティの中心として位置づけてきた先人たちの叡智のなかに、われわれはまだまだ参考にすべき点、学ぶべき点が多いように思われる。広井良典らによる「地域コミュニティ政策に関するアンケート調査」（2007年5月）によれば、地域において特に重要とされる場所の1位は学校、2位が福祉・医療関連施設、3位が自然関係、4位が商店街、そして5位が神社・お寺等という傾向が見られたという。この結果に「神社・お寺などの宗教施設は、“彼岸あるいは異世界”との接点」として「コミュニティの中心」としての役割を果たしてきた、と分析されている（注23）。

パットナムはソーシャル・キャピタルの意味するのは社会的なつながりのネットワークであり、「『共にする』こと」であるという。つまり、宗教者からの一方的なはたらきかけではなく、市民・行政との「共にする」協働が必要となるのである。宗教と社会の「互惠性」のために、地域社会の中で宗教者たちが市民たちと共に公共的な役割を果たし、新しいつながりをつくったり、それまでのつながりを結び直すことで、「地域社会をつくる宗教」の具体的な姿が浮かび上がる（注24）と述べているが、その推進役としての自治会長のリーダーシップは大きい。

今後の課題として、宗教的寛容の心で地域内の宗教施設（宗教者）を尊いものとしてそこに集い会い、

家庭と宗教施設を往還できる様な松徳院での地域イベントの開催を継続・発展させ、他の宗教施設にも開催できるよう働きかけ、お互いが心を打ち明けて助け合うような気風を醸成していく。そして、これらを進めることにより、「この地域に住んでよかった。」と思える、まさに宗教の目的である人間の幸福に繋げることができるのではないだろうか。

注

- (1) 鶴飼秀徳『寺院消滅』日経B P社 2015 p 157
- (2) 『平成 28 年 10 月 1 日現在の名古屋市の世帯数と人口
名古屋市総務局企画部統計課庶務人口担当
- (3) 中田実共著『町内会のすべてがわかる「疑問」「難問」100
問 100 答』じゃこめてい出版 2008 p 135
かつて、佐賀県鳥栖市に住んでいる夫婦が、自治会費に
含まれている神社関係の支払いを拒んだら、自治会から
除名されるという事件が起こった。そこで、仏教の信者
である夫婦は、自治会と自治会長を相手に、自治会員と
しての地位確認と慰謝料請求の訴訟を起こした。その結
果佐賀地裁判決（2004 年 4 月 12 日）は、「特定宗教関
係費の一括徴収は信教の自由を侵害し、憲法の趣旨に違
法」として、原告の自治会長としての地位を認めた（慰
謝料については棄却）。判決は、自治会の運営について、
「構成員が様々な信仰を持つことを前提にしなければな
らない」と指摘し、一括徴収については、「神社神道を信
仰しない原告らにとって事実上、宗教上の行為への参加
を強制するもので、信教の自由、信仰の自由を侵害し、
憲法上の趣旨に反する」という判断が下された。（『朝日
新聞 2002 年 4 月 13 日付』）
- (4) 島田裕『宗教消滅』SB 新書 2016 p 239
- (5) ソーシャル・キャピタルとは、アメリカの政治学者パ
ットナムが 2006 年に世界的に普及させた用語である。社
会資本もしくは社会関係資本と訳され、（社会や他者へ
の）信頼、互惠性の規範ネットワークの総体を示す概念
である。地域社会における経済活動、社会福祉や公衆衛
生、市民活動や政治参加社会問題への取り組みへの意欲
やパフォーマンス、効果を上げるためにソーシャル・キ
ャピタルの形成や活性化が重要と考えられている。この
ような考え方がでてきた背景としては、先進国における
ポスト福祉国家論と途上国を含む地域開発論の進展があ
る。
- (6) 坪郷實編著『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房
2015 p139
- (7) 同上書 p 149
- (8) 櫻井義秀 川又俊則編『人口減少社会と寺院—ソーシ
ャルキャピタルの視座から』宝蔵館 2016 p 35
- (9) 同上書 P.36
- (10) 稲葉圭信 櫻井義秀[編]『社会貢献する宗教』世界思想社

2009 p 69

濱田は相互信頼社会をつくる具体例として 3 要件を挙
げている。

- (11) 櫻井義秀 川又俊則編『人口減少社会と寺院—ソーシ
ャルキャピタルの視座から』宝蔵館 2016 p 91
- (12) 松本紹圭・井出悦郎『お寺の教科書』徳間書店 2013
p82
- (13) 武者野小路実篤（明治 18(1885)年～昭和 51(1976)年）
は大正 7 年春、以前から抱いていた理想社会についての
考えを「白樺」誌上などで発表し、この呼びかけに全国各
地から賛同者が集まった。新しき村の運動が急速に盛り
上がる中、11 月には実践の場として宮崎県児湯郡気城
村(現在気城町)大字石河内字城に土地を求めた。当時の
社会状況では、階級も身分も超え、人間らしい生活を求
めるこの提唱は、大変画期的なものであった。新しき村
では、労働の責任を自主的に負う義務労働があり、その
合間に、芸術の創作や鑑賞など文化活動も盛んに行われ
た。村の経済は、そのほとんどが実篤の収入によるもの
があったことから、大正 14 年実篤は執筆に専念するた
め村での生活を離れることになり、以後は村外から資金
的、精神的支援を送り続けた。昭和 13 年、日向の土地
の一部がダム工事のため水没することになり、東京近郊
に新たな土地を求め、翌年 9 月埼玉県入間郡毛呂山町葛
貫に東の村を設立した。戦中・戦後の困難な時期を乗り
越え、昭和 34 年には、念願の経済的自立を達成した。
現在も新しき村は日向と埼玉の 2 ヶ所で、実篤らがめ
ざした理想社会を求めて活動が続けられている。
- (14) 岩波国語辞典「宗教」「信仰」
- (15) 武者小路実篤『この道を歩く』角川書店 1958 p184
- (16) 同上書 p 185
- (17) 福田清人・松本丈夫『武者小路実篤』清水書院 1953
p 101
- (18) 山田英世『J.デューイ』清水書院 1966 p 63
- (19) 魚津郁夫『プラグマティズムの思想』ちくま学芸文庫
2006 p 260
- (20) J.デューイ栗田修訳『人類共通の信仰』晃洋書房 2011
p 13
- (21) 杉浦宏『現代デューイ思想の再評価』世界思想社 2003
p 209
- (22) 大谷栄一 藤本頼生『地域社会をつくる宗教』明石書店
2012 p 62
- (23) 同上書 p 89
- (24) 同上書 p 36

引用文献・参考文献

- ・NHK 放送文化研究所「編」『現代日本人の意識構造』NHK
ブックス 2015
- ・広井良典『コミュニティを問い直す』ちくま新書 2009
- ・中田実『地方分権時代の町内会・自治会』自治体研究社
2007
- ・中田実『これからの町内会・自治会』自治体研究社 1981
- ・鳥越皓之『地域自治会の研究』ミネルヴァ書房 1994
- ・山崎丈夫『地域コミュニティ論—地域分権への協働の構

- 図』自治体研究社 2003
- ・山崎丈夫『地縁組織論』自治体研究社 1999
 - ・辻中豊・ロバート・ペッカネン・山本英弘『現代日本の自治会・町内会』木鐸社 2009
 - ・岩崎信彦編『町内会の研究』お茶の水書房 1989
 - ・島田裕己『日本の10大新宗教』幻冬舎新書 2007
 - ・島田裕己『創価学会』新潮新書 2004
 - ・高橋卓志『寺よ、変われ』岩波新書 2009
 - ・沼田健哉『現代日本の新宗教』創元社 1988
 - ・山折哲雄『日本の宗教』日本文芸社 1995
 - ・司馬遼太郎『宗教と日本人 司馬遼太郎対話選集8』文春文庫 2006
 - ・瓜生中『知っておきたい日本人のアイデンティティ』角川ソフィア文庫 2010
 - ・中村雄二郎『宗教とは何か とくに日本人にとって』岩波現代文庫 2003
 - ・池上良正編『岩波講座2 宗教への視座』岩波書店 2004
 - ・竹内整一『宗教と寛容』大明堂発行 1993
 - ・竹村牧男『日本仏教思想のあゆみ』講談社学術文庫 2015
 - ・末木文美士『日本宗教史』岩波新書 2006
 - ・末木文美士『日本仏教史』新潮文庫 1996
 - ・末木文美士『日本仏教の可能性』新潮文庫 2011
 - ・釈徹宗『宗教は人を救えるのか』角川SSC新書 2014
 - ・小倉豊文編『地域社会と宗教の史的研究』柳原書店 1963
 - ・臨時増刊 文芸『武者小路實篤読本』河出書房 1945
 - ・巡政民『デューイ研究—仮説と探索の思想体系—』春秋社 1956
 - ・J.デューイ、安部齋訳『公衆とその諸問題』ちくま学芸文庫 2014
 - ・杉浦宏編『現代デューイ思想の再評価』世界思想社 2003
 - ・レイモンド・D・ボイスヴァード 藤井千春訳『ジョン・デューイー現代を問い直す』晃洋書房 2015
 - ・J.C.マクスウェル上原裕美子訳『つながり力』辰巳出版 2012
 - ・内山節『共同体の基礎理論』農文協 2010
 - ・田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房 2010
 - ・銭廣雅之『「地域」の哲学』北樹出版 2004
 - ・日本経済新聞社編『名古屋』日本経済新聞社 1996
 - ・岩中祥史『名古屋学』新潮文庫 2000
 - ・中根千枝・村手元樹『名古屋謎解き散歩』新人物文庫 2013
 - ・名古屋市北区役所 北区政50周年記念実行委員会『北区誌』記念区誌編纂委員会 1994
 - ・沢井鈴一 伊藤正博『北区歴史と文化探検トリップ』名古屋北ライオンズクラブ 2005
 - ・名古屋市楠町史編集委員会『名古屋市楠町史』名古屋市楠町誌刊行会 1957
 - ・ふるさとの歴史を語る会『楠西学区の歴史』愛知県郷土資料刊行会 1973
 - ・長谷川國一『名古屋区史シリーズ 北区の歴史』愛知県郷土資料刊行会 1985

（原稿受理年月日 2016/11/30）